

小山台高校定時制と立川高校定時制を存続させるため

私たちは都民のみなさんに訴えます

小山台高校定時制と立川高校定時制の存続を一都民のみなさんへのアピール

東京都教育委員会は2016年に4校(小山台、雪谷、江北、立川)の夜間定時制高校の閉課程(廃止)を決定しましたが、存続を求める声が広がり、小山台と立川の定時制は生徒募集が続いています。しかし、両校の生徒募集は2022年度までは決まっていますが、その後は未定です。

小山台高校定時制と立川高校の定時制は、かけがえのない学校です。小山台高校定時制は、東京都教育委員会や文部科学省の人権教育推進校にもなり、外国籍の生徒や外国につながる生徒を多く受け入れ、多文化共生教育を積極的に進めてきた学校です。品川・目黒・大田区の境界にあって、目黒線武蔵小山駅の前に立地しています。立川高校定時制は、多摩地域の交通の要である立川駅から10分以内の距離にあります。八王子市にあった4校の夜間定時制がなくなったため、多くの生徒が立川高校定時制に通学しています。新宿から高尾までの中央線沿線には普通科の夜間定時制は立川高校しかありません。そのため、従来から生徒が多く、現在、普通科の夜間定時制では最大の生徒数となっています。

こうした夜間定時制を廃止するには、それだけの理由がなければなりません。ところが、今日まで東京都教育委員会はその理由を明示したことがありません。「定時制に学ぶ生徒が減っている」「勤労青少年が少ない」「チャレンジスクールを希望する生徒が多い」などの理由は、今日の夜間定時制を取り巻く一般的状況にすぎません。例え、そうであったとしても、「なぜ唯一のユニークな教育を行っている学校をなくすのか」「なぜ最大規模の学校をなくすのか」という疑問には一切答えていません。

東京都の夜間定時制は、戦後、働きながら学ぶ学校として、その役割を果たしてきました。現在は、昼間働いている生徒だけではなく、全日制に合格できなかった生徒や、高校を中退した生徒、不登校経験者、夜間中学の卒業生、外国につながる生徒、若い時に学ぶ機会を逸した年配の社会人など、さまざまな生徒が学んでいます。とりわけ、コロナ禍によって社会的貧困が広がるなかで、誰もが、いつでも、少人数で学ぶことができる夜間定時制の必要性は高まっています。夜間定時制は、昔も今も、セーフティーネットの役割を果たしています。都立高校は都民の財産です。小山台高校定時制と立川高校定時制の閉課程を中止し、両校の存続を求めます。

2021年3月

相田利雄 (法政大学名誉教授)
石川文洋 (報道カメラマン・都立両国高校定時制卒業生)
梅原利夫 (和光大学名誉教授)
太田直子 (映画「月あかりの下で-ある定時制高校の記憶」監督)
太田政男 (大東文化大学元学長)
河路由佳 (日本語教育研究者)
小島昌夫 (元都立高校定時制教員)
多賀哲弥 (元都立高校定時制教員)
堀尾輝久 (東京大学名誉教授)
森 康行 (映画「こんばんは」「こんばんはII」監督)



石川文洋

私は定時制高校に通学したのでカメラマンになりました。昼間、給仕として働いていた新聞社のニュース映画社に就職したからです。学校生活は人生に影響します。今、定時制を必要としている様々な立場の人がいます。その人たちの場が失われてはいけません。



太田直子

学校は、生きる希望をくれた場所。映画『月あかりの下で』の舞台、埼玉県立浦和商業高校定時制で出会った宝の言葉は、都立立川高校と小山台高校定時制につながる。通う人たちのいのちと未来を支え続ける、尊い学び舎を潰さないでほしい。